

## 「金瓶梅」の創作手法

—その娯樂性と政治性について—

荒 木 猛

はじめに

「金瓶梅」百回は、ご存知の通り、「水滸傳」の二十二回から二十七回までの武松物語をベースにして作られている。

では、「金瓶梅」の作者<sup>(注一)</sup>は、なぜ「水滸傳」を用いたのだろうか。かつて小野忍氏は、その理由として、「水滸傳」の中で、西門慶と潘金蓮の話は唯一の情話で、プロットもおもしろいし、描寫も出色で、ことに王婆が西門慶にくどきの術を授けるくだりは、とびぬけてすばらしい。そこで、この小説の作者は、ここに着目したのではないかということと、そもそも、明代の小説では、既成の作品から着想や素材をえることが一般的であり、「金瓶梅」の作者もその慣例に従ったものではなにかという二點を挙げられた。<sup>(注二)</sup>

では、このことは「金瓶梅」の創作動機から考えてどうだったのだろうか。また、小野氏のようにたとえ作者が「水滸傳」中の西門慶と潘金蓮物語のプロットがおもしろいからこれを素材として使おうとしたにしても、「金瓶梅」の最初の箇所において、まったく安易なまでに、「水滸傳」を抄

襲することはなかったのではないか。

筆者は、この作者が「金瓶梅」を書こうとした眞のねらいは、明代の自分が見聞したところを、いわゆる「借古諷今」の手法で書こうとしたものと見てゐる。その際、先行する幾多の小説のうち、「水滸傳」に描かれた北宋末という時代が、自分がこれから書こうとする時代に酷似していることに着目したのではないかと考えてゐる。

いうまでもなく、中國文學には古來「諷諭」の傳統があり、このことは詩文において顯著であつたことが知られてゐるが、白話小説においても、この傳統とまつたく無關係ではなく、なかでも「金瓶梅」において、この諷諭の要素を無視すべきでないと筆者は考えてゐる。

では次に、この小説は、北宋の古に材を借りて、今の何を諷諭しようとしたのが問題となるであらう。このことを明らかにする一つの方法として、「金瓶梅」の作者がこの小説を作るにあつて用いた素材に着目して、それら素材をどのように用いてゐるか、素材と作品との比較から、これを明らかにすることができないだろうか。ご承知の通り「金瓶梅」には、おびただしい素材が使われている。それら素材を、この作者は、自分獨自の創作意識によりいささか變えて作中に採用しているが、今回は特に、作中の人物描寫について、素材と作品がどうへだたつてゐるかを見てみたい。

一

知られる通り、「金瓶梅」は萬曆二十四年頃から、董其昌・袁宏道・袁中道・沈德符・馮夢龍な

どと言った當時の一流の文人達の間でその存在が知られ始め、萬曆四十五年「金瓶梅詞話」が刊行されるまで、これら文人達によつて、この小説に關しいろんな評價がなされてきた。

その評價は大きく言つて、① 淫書である。② 社會の暗黒面を暴露した風刺小説である。の二つの評價に分かれる。このうち、②について、では明代のいつごろのいかなる暗黒面を風刺したものとして言うかと、これはいずれもよく引用されるものだが、

(1)「萬曆野獲編」では、「聞くところに依れば、これは嘉靖間の大名士の手筆になり、時事を指斥し、蔡京父子の如きは分宜（明の嚴嵩のこと）を指し、林靈素は陶仲文を指し、朱勔は陸炳を指し、その他も各々モデルがあると言われている。」

(2)「山林經濟籍」では、「傳える所に依れば、嘉靖の頃、ある人が都督の陸炳に誣奏され、朝廷からその家を沒收され、その人は冤罪に沈んだ。そこで、そのことを「金瓶梅」に託した。」

(3) 謝肇淛「金瓶梅跋文」では、「傳える所に依ると、世宗の治世に金吾の職にあつた者が、その身分と權力を嵩に淫蕩を極めた。ところで、その家で食客となつていた者が、これを苦々しく思いつつも、材料を選び、毎日の行事を集めて一冊の本とし、西門慶を主人公とした。」

(4) 廿公「金瓶梅」跋文では、「金瓶梅傳は、世廟の時の一鉅公の寓言たり。蓋し刺る有るなり。」

と見える。このうち(1)～(3)がいずれも、「傳える所に依ると」と傳聞の形をとっているものの、以上すべて、「金瓶梅」は嘉靖時代のことを風刺したものであると言っているのがわかる。

では、以上 沈德符・屠本峻・謝肇淛・廿公と、「金瓶梅」が創作され、それが世間に公開されて間もない明代の人々が、何を以つてこの作品が「借古諷今」の作風による作品であり、實際に風刺しているのは、嘉靖年間の暗黒面であると感じとつたのであろうか。

また、以上の明人の指摘が眞に的を得たものであるのか、つぎに、このことについて考えて見てみたい。

二

「金瓶梅」の作者がどのような意圖でこの小説を書いたかは、彼が驅使したおびただしい素材の使い方からも窺える。「金瓶梅」におびただしい素材が使われていることは、パトリック・ハナンの研究以來 周知の事實である。(注三)

このうち、この際この作品の創作動機を窺うのに有効だと見られるのは、次の個所であろう。

- ①、二回の朱勔 — (素材) 「水滸傳」二十四回
- ②、十回の陳文昭 — (素材) 「水滸傳」二十七回
- ③、十四回の楊時 — (素材) 「林冲寶劍記」十八出・「醒世恒言」卷十三
- ④、四十八回の狄斯彬 — (素材) 「百家公案」五十回

以下、それぞれについて見てゆきたい。

①は、景陽岡における虎退治で勇名をはせた武松が、ある日縣知事から都に金品を届けてほしいとたのまれる個所である。まず原文を見てみよう。

「水滸傳」二十四回のこの個所は、

却說本縣知縣自到任已來、却得二年半多了。撰得好些金銀、欲待要使人送上東京去、與親眷處

收貯、恐到京師轉除他處時要使用。却怕路上被人刼了去、須得一個有本事的心腹人去便好。猛想起武松來。(中略)當日便喚武松到衙內商議道、「我有一個親戚、在東京城裡住、欲要送一擔禮物去、(中略)你可休辭辛苦、與我去走一遭。回來我自重重賞你。」

これに對して「金瓶梅」二回のこの個所は、

却說本縣知縣自從到任以來、却得二年有餘、轉得許多金銀。要使一心腹人、送上東京親眷處收寄、三年任滿朝覲、打點上司。一來却怕路上小人、須得一個有力量的人去方好。猛想起都頭武松、(中略)當日就喚武松到衙內商議道、「我有個親戚、在東京城內做官、姓朱名勳、見做殿前大尉之職。(中略)你休推辭辛苦、回來我自重重賞你。」

これに依れば、「金瓶梅」は、「水滸傳」と同様、武松が都に届けることになった金品は、縣知事が任期が満ちて轉任するにあたりよりよい轉任先を獲得する爲の運動費だったわけだが、「金瓶梅」の作者がここでただ一つ明らかに「水滸傳」から離れ、この小説を彼の創作意圖に沿うように改めている個所がある。それは、「水滸傳」では、その金品を單に都にいる親戚に預け、いずれ都に戻った折、知事自らそれを使つて好い轉出先を獲得べく運動するとあるのに對し、「金瓶梅」では、知事の都での親戚を殿前大尉をつとめる朱勳としており、届ける運動費も直接この朱勳宛に届けられることになっていることである。

朱勳は實在の人物で、「宋史」卷470にその傳がある。それに依れば、彼は蘇州生まれで、時の徽宗帝が都の東北に艮嶽という人口の造園を計畫した時、天下の珍木奇石を集めて都に運ぶいわ

ゆる「花石綱」の責任者となり、これにより、世人の恨みを買ひ、宣和七年太學生陳東が唱えた「六賊」の一人に数えられる。不思議なことに、この朱勔は「水滸傳」では登場しない。

ところで、朱勔の就く殿前大尉という職は、殿前司（禁衛の官署）の長官のことで、武官の最高位で正二品の職である。勿論、歴史上の朱勔はそのような大官についたこともなく、せいぜい防禦使（從五品）になつたにすぎない。

尙、殿前大尉と言へば、「水滸傳」では、第一回で龍虎山上清宮の伏魔殿を無理やりひらかせて百八の妖魔を逃がしてしまふ洪信が殿前大尉ということになっており、また、「醒世恒言」卷十三 勘皮靴單證二郎神では、楊戩を殿前大尉にしている。要するに、小説で殿前大尉とくると、往々陸軍大臣のような絶大な権力の保持者という設定なのである。

「金瓶梅」では、ここの他に七十回・七十一回の兩回に再びこの朱勔を登場させている。そこでは、朱勔が新たに太子太保に任ぜられたというので、禮部・吏部の大臣や皇族の方々も祝いに集まり、またこの時、金吾衛衣正千戸に昇進した西門慶が同僚の夏延齡とともに上京し、この朱勔を自分達の上司として拜謁している。この「金瓶梅」に描かれた朱勔は、既に歴史上の朱勔ではなく、明代における錦衣衛指揮使であつた陸炳あたりを念頭に置いて描かれていることは、既に論じた通りである。（註四）

さて元に戻つて、「金瓶梅」の作者が、ここで「水滸傳」から離れて、わざわざ縣知事の都にいる親戚として以上のような權勢を有する朱勔にと設定を變えているのは、字數にして僅かな改變だが、内に含まれる意味合いには重大なるものがある。

次に、②を見てみよう。これは、陳文昭という府知事が武松を裁く個所である。

「水滸傳」二十七回では、武松が兄の仇を討つべく、西門慶と潘金蓮の二人を殺すことになつて

いるが、「金瓶梅」十回では、この時武松は下級役人の李外傳を西門慶と間違えて殺してしまい、西門慶と潘金蓮の二人はこのあとも生き延びることになっており、ここが大きな相違点だが、この武松を裁く府知事の陳文昭についても「金瓶梅」で若干書きかえられている。

まず、「水滸傳」二十七回では、

且說陳府尹哀怜武松是個有義的烈漢、如常差人看覷他。因此節級牢子、都不要他一文錢、倒把酒食與他吃。陳府尹把這招藁卷宗都改得輕了、申去省院詳審議罪。却使個心腹人、賁了一封緊要密書、星夜投京師來、替他幹辦。

とあるのみだが、「金瓶梅」十回では、

早有人把這件事報到清河縣、西門慶知道了、慌了手脚。陳文昭是個清廉官、不敢來打點他。走去央求親家陳宅心腹、并家人來旺、星夜來往東京、下書與楊提督。提督轉央內閣蔡太師、太師又恐怕傷了李知縣名節、連忙賁了一封緊要密書帖兒、特來東平府下書與陳文昭、免提西門慶、潘氏。這陳文昭原係大理寺寺正、陞東平府府尹、又係蔡太師門生、又見楊提督乃是朝廷面前說得話的官、以此人情兩盡了、只把武松免死、問了個背杖四十、刺配二千里充軍。

とあり、東平府の陳文昭という人は、いたって清廉な官吏であり、武松の裁判では、武松に同情しできるだけ罪を軽くしようとする所のみ「金瓶梅」は「水滸傳」を踏襲したが、「金瓶梅」には、今見たような更なる大幅な追加の部分がある。それは、

1. 自分にも司直の手の及ぶことを豫め察知した西門慶が、  
2. 下男に手紙をもたせ都の顯官で遠い親戚にあたる楊戩のもとまで届けさせる。その手紙を見た楊戩は、この件を朝廷での最高權力者の蔡京に依頼する。

3. 同僚のたのみを斷るわけにはゆかない蔡京は、これをひきうける。好都合なことに、蔡京にとつて陳文昭は門生であつたから、こつそり手紙を認めて陳文昭に西門慶らの罪を不問に付すよう申し渡す。

4. かつての座主で今は朝廷での最高權力者からの要請をうけた陳文昭は、やむなく蔡京の顔を立てて西門慶らの罪は一切問わぬこととし、他方、武松に對しては、せいぜい死罪にせず孟州への流罪という處置にする。

と以上、1から4までを追加している。

これらの追加部分には、①と同様に「金瓶梅」の作者による強い作意が働いていると見なければならぬ。つまり、中央政界に賄賂や情實によつて政治をねじまげる巨惡がいて、世の中にたまに清廉で正義感のある役人が居たとしても、いずれも巨惡の前ではほとんど無力であるとする世界をえがこうとする作意である。

「金瓶梅」三十回では、西門慶がこの蔡京に誕生祝いの金品を贈つてその歡心を買ひ、山東提刑所副千戸という官職を得ることになっているし、五十五回では、西門慶がやはり太師の誕生祝いに上京し、願つて蔡京の義理の息子にしてもらつてゐる。一方、陳文昭のように清廉で正義感の強い役人は、彼の他にも、十四回の楊時 二十七回の侯蒙 三十五回の曾孝序などいないわけではないが、楊時は陳文昭と同じく蔡京の門生なので、蔡京の顔を立て妥協し、侯蒙も蔡京の依頼をうけて不正を行つた鹽商人を釋放する。曾孝序だけが蔡京に最後まで楯突くが、結局、事實無根のことで



罪をきせられ嶺南に流されてしまうことになっている。

つまり、「金瓶梅」全體が蔡京を頂點とする反面人物達の跳梁する世界であり、陳文昭ら正面人物はその正義感を發揮することなく後退を餘儀なくされ、時には、妥協を餘儀なくされることになっている。

「金瓶梅」の作者は、このような暗黒の情實腐敗の政治社會を描こうとしていることを、これより見て取ることができる。

ところで、ここに登場する都の巨惡蔡京は、この小説が世に通行しだした時からすでに、嘉靖時代の嚴嵩がそのモデルと目されてきた人物である。實は、この陳文昭と同名同姓の人物が、明代のそれも蔡京のモデルとされる嚴嵩の時代に實在していた。

その歴史上の陳文昭なる人物は、「明清進士題名碑錄索引」に一名見え、

陳文昭、山東濮州人。明 正德九年榜二甲第二十八進士

とある。さらに、宣統元年刊「續濮州志」卷四續鄉賢志を見ると、

明・陳文昭、字明甫。正德癸酉解元、甲戌進士。仕至戶部員外郎。正色立朝、彈劾不避權貴。時閣臣嚴嵩專橫、文昭抗論之、且奮怒欲批其頰、以此下獄、廷臣楊繼盛稔其忠直、疏救得免。

とある。これによれば、明の戶部員外郎であつた陳文昭なる人物は、曲がつたことが嫌いで、ある時、嚴嵩の專橫に怒つてその頰をなぐろうとして獄につながれたが、かの有名な楊繼盛のとりな

してことなきを得たとあり、なかなかの正義漢である。

この人物が「水滸傳」や「金瓶梅」のモデルかどうか本當の所はわからない。そもそも、小説はあくまでも小説であつて、歴史そのものではなく、小説と歴史をごっちゃにすると、初期の「紅樓夢」研究がモデル詮索にとどまったのと同様、結局不毛の結論をもたらすという意見がある。(注五) 今も日中の一部の學者の間で、紅樓夢索隱研究の失敗にこりて、いささか癡に懲りて膽を吹くような傾向が残っているのではないか。確かに小説は虚構であり、それ全體を史實と見るべきではないのは當然だと思ふが、筆者は、作中に作者がこつそりと政治的風刺などを含むしかけを組み入れていたということは大いにありえたことと素直に考へてよいのではないかと思つている者である。

小説中の陳文昭は、蔡京の門生となつてゐるのに對し、歴史上の陳文昭とは言へば、蔡京のモデルとされる嚴嵩の專横に立腹して、その頬をなぐろうとした男であり、おおいに異なるが、小説上と歴史上の陳文昭は、嚴嵩という人物で一本の細い絲でつながつてゐる。

あるいは、「金瓶梅」における陳文昭は、「水滸傳」をそのまま踏襲しただけではないかと考へる人もあるかもしれない。しかし、たとえば萬曆四十二年に刊行された袁無涯刊行「李卓吾批評忠義水滸全傳」の當該部分の眉批に「陳文昭留名」(陳文昭の名がここに残つた)の五字が見える。この眉批を書いた人は袁無涯かどうか判らぬが、すくなくともこの批評者もこの陳文昭という人名に何か特別の關心をもつてゐたことがこれで判り、また讀者にもこの人名についてこれで注意を促してゐたのである。

「水滸傳」の作者がどういふつもりでこの人名を使つたかはともかく、「金瓶梅」の作者はこの人名を見て、自分の知つてゐる明代の陳文昭を投影させようとしたとも充分に考へられるところであらう。もし、筆者の推測が的を得てゐて、「金瓶梅」の作者が作中の陳文昭に、嘉靖時代の陳文

昭を投影させているとしたら、これはどう考えたらよいのであろうか。當然作者は、自分のこの作品の讀者として、陳文昭についてなにがしかの知識を有している者を想定したのであろう。もし作者がかかる讀者を想定して、確かに歴史上の陳文昭を十回のこの人物のモデルとしていたとしたら、なぜ作者が十回のように師の顔を立てて現實的對應をとる人物に書き改めたのだろうか。考えられることとして、次の二つの可能性が考えられる。

(1)、正義感が強く、ややもすれば事の前後をわきまえず行動する硬骨漢から、その純粹さ一途さといういわば牙を抜いてしまつて、どこにでも居そうな利口者になり書き變えることによって、讀者の失笑をみちびきだそうとした可能性。

(2)、たとえ世の中にどれだけ正義漢がいようと、それを押しつぶすコネと賄賂による暗黒の世界を描こうとした可能性。

次に③を検討してみよう。「金瓶梅」十四回登場の楊時も、陳文昭と同じく清廉な役人だが、昔の恩師の蔡京の顔を立てて裁判をしてしまうことになっている。

この十四回は、西門慶の取り巻きの一人の花子虚が親の財産相續をめづつて兄弟から訴えられる個所である。この花子虚の妻が李瓶兒で、この時すでに西門慶とは不義の密通關係にあつたが、その李瓶兒は夫の裁判のことが心配で、ある日、このことについて西門慶に相談する。すると西門慶は、都の高官に遠縁の親戚にあたる人で楊戩という方がいらつしやるので、そこから手をまわしてもらつて、子虚君に有利な裁判となるよう働きかけましようと言う。ここの所、「金瓶梅」十四回の原文は

西門慶（中略）差家人上東京。一路朝登紫陌、暮踐紅塵。有日到了東京城內、交割楊提督書

禮、轉求內閣蔡太師柬帖、下與開封府楊府尹。這府尹名喚楊時、別號龜山、乃陝西弘農縣人氏。由癸未進士陞大理寺卿、今推開封府裏、極是個清廉的官。況蔡太師是他舊時座主、楊戩又是當道時臣、如何不做分上。

これによつて判る通り、上記開封府長官の楊時も清廉な役人ではあつたが、蔡京の門生であつたため蔡京の顔を立て、その依頼通りの裁きをつけることになつてゐる。

この開封府府尹楊時の素材は、何だつたのだろうか。筆者は、たぶんその素材は現存する「醒世恒言」卷十三 勘皮靴單證二郎神の祖本だと考えるが、それに及ぶ前に、しばらく「水滸傳」を見てみたい。「水滸傳」八回に開封府府尹として滕府尹という人物が登場し、林冲の事件を扱う。そして太尉高俅の要請をうけて、林冲を死罪に處そうとするが、部下の孫孔目にはばまれて、滄州流罪にしてしまう。この「水滸傳」中の林冲物語を戯曲化したものに、李開先の「林冲寶劍記」がある。これによると、その第十八出に開封府府尹として林冲の事件を扱う楊清字孝廉という者を登場させてゐる。ここでの楊清は、高官の高俅と童貫から林冲を死罪にするよういろいろと壓力をうけるが、彼は、その正義感からそれをはねかえして、滄州流罪に決する。

「水滸傳」に見える滕府尹は、見識がなく、高官に言われれば言われたとおりの裁きをする人間だが、李開先の「林冲寶劍記」に見える楊府尹は、見識と正義感があり、高官の要請をはねかえしている。「金瓶梅」中の楊府尹は「林冲寶劍記」から取材したもののようにも考えられる。事實、これまで「金瓶梅」中に「林冲寶劍記」からとられたと思われる曲辭等が見られることからこの兩者の關係が指摘されてきている。<sup>(註六)</sup> 名前も楊清と楊時とすこし違ふが、姓は同じ楊である。しかし、「醒世恒言」の方は、次に引用するように、正に楊時であり、蔡京の門生とする點でも酷似す

る。

却有一個門生、叫做楊時、便是龜山先生、與太師極相厚的。陞了近京一個知縣、云々。（「醒世恒言」卷十三）

この作品の編末に「原係京師老郎傳流」の八字が見えることから、もともとこの話は南宋の講釋師によつてかたられていた可能性が高い。また、故譚正璧氏もかつて羅燁の「醉翁談錄」の「小説開闢」の條に見える「聖手二郎」がこの作品だろうと推測した。<sup>（注七）</sup>「金瓶梅」の作者が直接この「醒世恒言」卷十三の祖本を参照したかどうかは判らないが、講釋や通俗文藝の世界では、宋の大儒楊時を蔡京の門生だとする設定の話が結構あつて、「金瓶梅」の作者は、そうしたもののなかから楊時が蔡京の門生だとする設定を採用したのかもしれない。

ところで、この楊時は、言わずと知れた北宋の大儒者であり、「宋史」卷428にその傳が見える。

それに依れば、楊時は福建將樂の生まれ、熙寧九年の進士。程顥に師事し學を深め、人々から龜山先生とよばれ尊敬された。徽宗帝より國子祭酒に任命された時、蔡京の施政を痛烈に批判し、その政治の大本が王安石であるとして、その王安石の爵位を追奪することを上奏している。

この「宋史」の記述から明らかなように、歴史上實在の楊時は、蔡京の門下生であつたこともなく、むしろ、蔡京の施政の批判者であつた。この點、「醒世恒言」や「金瓶梅」の楊時についての設定は、まったくあべこべの正反對の人物設定にしていると言える。また、さきに見た歴史上の陳文昭と小説上の陳文昭があべこべであつたのと軌を一にしている。しかも、この十四回の楊時もさ

きの陳文昭と同じように座主であり中央の権力者たる蔡京には頭があがらず、結局太師の顔を立てて、花子虚のみ多大な遺産にありつける判決を下す。そして、その遺産はほどなくすべて西門慶の懐に入ることになっているのである。

では次に、「金瓶梅」の作者がなぜここに楊時という人名をこのような設定において使ったかにについて考えるならば、陳文昭と同様、やはり次の二通りの可能性が考えられよう。

(1)、王安石の新法に反対し、その末流の蔡京の施政を厳しく批判した大學者楊時を、蔡京の門下生にして、京の言うことを忠實に實行する人間に變えることによって、讀者の笑いをさそうおうとした可能性。

(2)、陳文昭と同様、時の権力者の失政を批判したことで有名な楊時でも、権力者の門生にしてなんでも言いなりになる人物に書き變えることによって、光明の見出せぬ絶望的な役人世界を描こうとした可能性。

最後に④の「金瓶梅」四十八回の狄斯彬について見てみよう。

話は、揚州の素封家苗天秀なる者が、ある日都で通判を勤める従兄の黃美から誘いをうけ、都見物がてらに上京し、ついでに就職運動をし、立身出世をはかるべく船をやって出發するところからじまる。ところが、この時連れていた下男が悪者で、旅の途中で船頭二人とグルとなり、苗天秀を殺した上、その死體を水中に投げ、一緒にいた小者も水中にたたきおとしてしまう。その後で、主人の天秀が都での就職運動資金としての金銀を三人で山分けをする。小者は、幸いにも某船頭に水中から救い出され一命をとりとめ、他方、苗天秀の死體は、岸に流れ着いて近くの慈惠寺の僧に發見され埋葬されるというものである。

この個所は、「百家公案」から取材されていることは、すでにパトリック・ハナンの研究で明ら

かである。(注八)

この「百家公案」と「金瓶梅」とを比較すると、「金瓶梅」において若干書き換えられている所が認められる。それは、主に次の二点においてである。

(1)、人名の改變

揚州の素封家で上京の途中で殺される人を、「百家公案」では、蔣寄字天秀としているのに對して、「金瓶梅」では、苗員外字天秀にしている。妻は、「百家公案」では始め李氏と書き後で張氏とあつて混亂しているが、「金瓶梅」では、李氏となつてゐる。上京の途中惡船頭とグルになつて主人を殺害する下男は、「百家公案」では、董家人とあるところを、「金瓶梅」では苗青にしている。同じく、主人と同行してあわや殺されそうになるも一命をとりとめた小者は、「百家公案」では琴童だつたところを、「金瓶梅」では安童にしている。そして、なによりも違ふのは、怪しいつむじ風の導きでそれまで埋められてあつた素封家の死體を發見する下級役人を、「百家公案」ではかの有名な包拯の部下で張龍という者に行っているのに對し、「金瓶梅」では陽谷縣縣丞の狄斯彬とすることになっていることである。

(2)、筋・展開の改變

「百家公案」では、一命とりとめた小者の琴童がある日街で仇の船頭二人を發見し、その時たまたま清河縣の役所に逗留中であつた包拯にこのことを訴え出る。すると包公さつそく役人を派遣してこの二人の船頭を逮捕したが、残る董家人の行方は杳としてわからなかつた。後、董家人は主人の財を元に巨商となつたが、まもなく揚子江で盜賊に會い全財産をすつかり奪われるという筋立てだが、この部分「金瓶梅」の方は大いにこれと異なり、次のようになつてゐる。

1. 一命とりとめた小者の安童がある日街で仇の船頭二人を見つけ、このことを守備府に訴え出

る。

2. 提刑所の役人が二人の船頭を逮捕する。

3. 追求の手が自分に及ぼうとしていることを豫め察知した苗青は、人傳てに西門慶に賄賂を贈り犯人一味のリストから自分の名前を除いてもらう。

4. 安童が上京し主人の親戚で通判の職にあつた黃美に訴えるところにも巡按察院にも訴え出る。巡按山東監察御史の曾孝序は、清廉で正義感あふれる役人であつたから、黃美と安童の訴狀を見てただちに事の真相を察知し、彈劾文を書いて西門慶らの不正を糾弾する。

5. 邸報で彈劾されたことを知つた西門慶は、都の太師蔡京邸に下男の來保らをおくつて、この彈劾文が皇帝の手に渡る前ににぎりつぶすよう頼みにゆかせる。

大きな改筆部分は以上の通りである。まず、人名について検討してみたい。人名の改變でなによりも注目されるのは、殺害された商人の遺體を發見する役人が、「百家公案」の張龍が「金瓶梅」では狄斯彬になっていることである。

この狄斯彬については、しばしばこれまで指摘されてきたように、明代に一人同姓同名の者がいる。(注九)

その人物は、「明史」卷209 馬從謙傳に見える。

馬從謙字益之、溧陽人。(中略)稍進光祿少卿。提督中官杜泰乾沒歲鉅萬。爲從謙奏發、泰因誣從謙誹謗。巡視給事中孫允中、御史狄斯彬劾泰、如從謙言。帝方惡人言醺齋、而從謙奏頗及之、怒下從謙及泰詔獄。所司言誹謗無左證、帝益怒。下從謙法司、以允中・斯彬黨庇、謫邊方雜職。法司擬從謙戍遠邊。帝命廷杖八十、戍煙瘴、竟死杖下。



つまり、宦官の杜泰という者が巨萬の官費を横領していることに對し、光祿少卿であつた馬從謙巡視給事中の孫允中 御史の狄斯彬らがこれを告發彈劾した。ところが彈劾された杜泰は、馬從謙の上奏文の中に嘉靖帝がいわゆる醺齋（道教の神々を祭る儀式）に關する言及のあることを摘發した。怒つた嘉靖帝は馬從謙を詔獄にとらえた上、廷杖を加えて殺してしまふ。また、孫允中と狄斯彬の二人には、馬從謙に同調した罪で遠方に左遷を命ずる。時に嘉靖三十一年十二月のことである。

狄斯彬・孫允中とともに嘉靖二十六年の進士であり、また、斯彬は馬從謙と同郷の生まれである。清 嘉慶「溧陽縣志」卷十一官蹟 を見ると、

狄斯彬字文仲、冲從子也。嘉靖二十六年登進士第、授行人、擢御史。會光祿少卿馬從謙以奏論中官杜泰乾沒光祿銀、座誹謗。斯彬劾泰如從謙言。竟下從謙法司、而謫斯彬遠方雜職。得宣武典史、尋擢南京兵部主事。云々。

とある。「金瓶梅」の作者がなぜこの四十八回で狄斯彬という人名を出してきたのだろうか。この狄斯彬は本當に今舉げた明人の狄斯彬を念頭においたものだろうか。たまたま同姓同名だったということもかんがえられる。また、ことに「金瓶梅詞話」本には誤字が多い事で知られているが、人名においても誤字である可能性も否定できない。<sup>(注1)</sup>しかし、これまた指摘してきた所だが、「金瓶梅」にはこの狄斯彬の他に、四十九回の曹禾 六十五回の凌雲翼と、いずれも明實在の人物で、しかもすべて嘉靖二十六年の進士の名前が出てくる。これは單なる偶然とは考えにくく、從つ

て、この狄斯彬も同姓同名の他人とは考えにくい。しかも、狄斯彬という人名はそうざらに有る名前ではなく、例えば、試みに「二十四史人名索引」などを引いてみても、「明史」に上記の人名が見える以外はこの人名は見えない。

では、「金瓶梅」の作者がもし本當にこの狄斯彬という人名を、今挙げた明實在の人物を念頭において書き換えているとしたら、そこにいかなる意圖が考えられるだろうか。

「金瓶梅」四十八回では、狄斯彬のことを次のように書いている。

府尹胡師文見了上司批下來、慌得手脚無措、卽調委陽谷縣縣丞狄斯彬、本貫河南舞陽人氏、爲人剛而且方、不要錢、問事糊突、人都號他做狄混。（中略）正行之際、忽見馬前起一陣旋風、（中略）那公人眞個跟定旋風而來、七八將近新河口而止、走來回覆了狄公話。狄公卽拘了里老來、用鋤開岸上深數尺、見一死屍、宛然頸上有一刀痕。

これに對して、このもとなつたと思われる「百家公案」の方を見ると、

是時包公因往濠州賑濟、事畢回轉東京、經清河縣過。正行之際、忽馬前一陣旋風起處、哀號不已。拯疑怪、卽差張龍隨此風下落、張龍領旨隨旋風而來、（中略）掘開岸上視之、見一死尸、宛然頸上傷一刀痕。

ともにつむじ風に導かれて死體を發見する設定はおなじだが、「百家公案」では張龍の人となりについて何も書いてないのに對して、「金瓶梅」の方は、狄斯彬のことを、わざわざ「頑固一徹、

金は欲しがらず取り調べがまぬけているので人からバカの狄とよばれている」と書いていたのである。

すでに「溧陽縣志」でも見たように、歴史上實在した狄斯彬は、正義感にあふれ、また、政治家として倭寇對策に適切な手段を講じたとか、縣稅の輕減を提言して、その策が當局に採用されたとかと有能な政治家であつたと同じく同書に書かれている。ところが、小説中の狄斯彬は、身分も縣丞と低い上さらに閑拔けの狄ということになっている。この點をどう考えたらよいのだろうか。もし、たとえ歴史上實在の人物を念頭においてこの部分を書いたとしても、これはあまりにもその人物像において違いがあるのではないかと言えるかもしれない。しかし、筆者はこの狄斯彬の場合もこれまで見てきた陳文昭や楊時と同様、正義感あふれ眞面目な實在の人間を、小説においてきわめて凡庸で權威によわく、またこの狄斯彬のように閑拔けで馬鹿な人間に書き變えることによつて、讀者の笑いをさそうことをねらつたものではないかと考えている。

また、筋・展開の改變に關しては、「金瓶梅」における西門慶が賄賂を得て苗青を見逃すことや、巡按御史曾孝序の彈劾文を都の大官蔡京がにぎりつぶすことなどは、素材と目される「百家公案」にはまったく見えない所である。このことから、「金瓶梅」の作者はこのように改變することによつて、これまで見てきた陳文昭や楊時と同様、都に巨惡のボスがいて、あらゆる不正や犯罪が賄賂によつて闇にほうむられるといった社會全體のどこにも光明の見出せない世界を描こうとしたと考えるべきであろう。

以上見てきたように「金瓶梅」に關する素材取材とその作品化についての一般的傾向を歸納化するならば、次の二點にまとめられるかと思われる。

1. 「金瓶梅」では、往々歴史上實在の人物を登場させる。そして、その歴史上の人物は、政治家として有能であり、正義感にあふれる人間だが、作品中では、これと異なり現實にすぐ妥協する人物ないし無能者のように描かれる傾向の見られることである。

このように變える目的として、その人物が眞面目で正義感あふれる人物であればあるほど、作中で平凡無能な人物に書き變えることによって、そこに底知れぬ滑稽味が出る。「金瓶梅」の作者は、この効果をねらったものではないかということがまず考えられる。尙、この効果を出すには、讀者もその人物についてある程度知識のあることを前提とする。また、作者もその人物についてなにがしかの知識をもっている讀者を想定してこの小説を書いていることになる。つまり、これは作者と讀者とがその身分や教養あるいは經歷においてもあまり隔たりのない可能性を意味する。作者と讀者の身分・教養・經歷があまりにも似ていると、その作品は、極端な場合、作者と讀者の内緒話ということすら想定しうる。「金瓶梅」は内緒話とまでは言えないにしても、まだ、謎が多い。例えば、作品の時代設定が北宋末である「金瓶梅」において、なぜ作中明代實在の人物名がみえるのか、しかも、なぜ嘉靖二十六年の進士の名前が見えるのか、皆目判らない。作者が想定した讀者なら、この間の事情を卽座に判ったはずであろうが、惜しいかな、時間的にも空間的にもあまりにも離れたしまった我々には、今まだこれらの眞相が判らない状態にある。

2. 素材と作品の對比から浮かび上がる今一つの傾向は、作品に見られる強い政治性である。

「金瓶梅」は表面上は淫猥な文章で綴られているが、そのかげで一本の政治性の伏線がうめこま

れている。すでに見たように、二回で武松が知縣の命令で都に赴くが、素材の「水滸傳」では、單に任が満ちたあと次の有利なポストを獲得する運動資金を都の親戚の家に預かってもらう爲とあつたものが、「金瓶梅」では、その美職獲得の爲の運動資金を都の大官朱勛に届けさすことにしている。この朱勛のモデルが錦衣衛指揮使の陸炳だと明代からすでに考えられていた。（「萬曆野獲編」）この小説は開卷部分からすでに賄賂情實政治を描こうとしている姿勢がここから読み取れるのである。

この後、十回の武松裁判、十四回の花家の遺産相續裁判、また十七回の宇文虚中による楊戩・陳洪らへの弾劾、二十六回の賄賂による鹽商人王四峰の釋放、四十八回の賄賂による苗青の釋放、四十九回の巡按御史曾孝序による弾劾等々 いずれの場合においても、西門慶は下男の來保を上京させ、執事翟謙を通じて太師蔡京に便宜をたのんでいる。その爲には、毎年かかさず蔡京の誕生日には祝いの金品を届けたり、五十五回のように、西門慶自身上京して蔡京に義理の息子になることを願ひ出てゴマをすっている。このゴマすりが效を奏して、三十回では、それまで一介の商人にすぎなかつた西門慶は蔡京より山東提刑所理刑という官職をもらう。この山東提刑所理刑は錦衣衛の役人を暗示したものであることは、すでに論じた所である。<sup>(註1)</sup> いわば西門慶の住む清河縣と都東京との間は、賄賂と情實政治のホットラインである。

一方、「金瓶梅」に登場するのはすべて惡辣役人や惡徳商人ばかりではなく、なかには、陳文昭や楊時といった清廉な役人が登場することはするが、いずれも史實と異なり都の巨惡蔡京の門生にして京には頭が上がない人間に描かれているし、蔡京や西門慶の不正を敢然と弾劾する曾孝序の彈劾文は天子の目に觸れる前にいともたやすくそれが握りつぶされてしまふばかりか、孝序自身も遠方に左遷されてしまふ。また狄斯彬のように、歴史上の實在人物像とは全然違つて間抜け人間に

かえられている。

以上のことから言えることは、「金瓶梅」の作者がこの作品で描きたかったことは蔡京を頂點とする反面人物の跳梁する世界であり、かつ、陳文昭や曾孝序ら一部正面人物も登場することはするが、すべて反面人物に壓殺されてその正義感を存分に發揮できない世界をも描きたかったものと思われる。

かく前途に希望のもてない暗黒の社會は、いずれは亡國へと導かれること必然である。ストーリーの時代を北宋末に設定するこの小説は、歴史の教える所に従い、金軍が都を包圍し、徽宗・欽宗の二帝を北に連れ去り、それまでの國が亡ぶ事を以って最終回をむすんでいる。

これまで見てきたように、この「金瓶梅」の作者は、この作品において、やがて金に滅ぼされてしまふ北宋末に時代相の類似を感じとつて明の嘉靖時代のことを描いたとすれば、いずれこの明も近い將來何かによつて滅ぼされるということを豫感していたのだろうか。

この小説は、遅くとも萬曆二十四年（一五九六）頃までには完成し世に出ており、それから約五十年後には、明は清に滅ぼされている。そして、これまで「金瓶梅」の作者と目されてきた李開先は隆慶二年（一五六八）に、王世貞は萬曆十八年（一五九〇）に、賈三近は萬曆二十年（一五九二）に、李先芳は萬曆二十二年（一五九四）に、屠隆は萬曆三十三年（一六〇五）に、王穉登は萬曆四十年（一六一二）と、いずれも萬曆四十五年「金瓶梅詞話」が出版される前に亡くなっている。再三説くように、いまだ眞の作者は確定していないが、恐らく、眞の作者も遅くとも自分の小説が出版される前に亡くなっていたことが充分に考えられる所である。かく考えるならば、この作者が萬曆年間中に亡くなっていたにもかかわらず、この小説を書きながら近い將來祖國明の亡ぶ豫感を感じ取っていたとするならば、この人は、まことに鋭い時代認識の持ち主であつたと思われる。

のである。

（注）

一、「金瓶梅」の作者に關する説には、大きく言つて個人創作説と集團創作説の二説があり、個人創作説は、更に、無名の下層文人説と有力文人説とにわかれる。有力文人説には、王世貞や李開先・屠隆・賈三近等二十數人の有力候補が擧がつているが、いまだ定論をみていない。

また、筆者がかつて指摘したように、「金瓶梅」に投影された時代と「金瓶梅」が執筆された時代、「金瓶梅」が出版された時代は、混同して論ぜられるべきではない（拙稿「『金瓶梅』執筆時代の推定」長崎大學教養部紀要 人文科學篇第三十五卷第一號 所收 一九九四年）という前提に立つて、この小説の成立を考えて見ると、「金瓶梅」に投影された時代が、これまた、これまで指摘してきたように、明・嘉靖年間（一五二二—一五六六）だとして、（拙稿「『金瓶梅』と楊繼盛—小説と戯曲との關係から見た—」長崎大學教養部紀要 人文科學篇第三十六卷第二號 所收 一九九六年）この小説が出版されたのは、現存最古の版本は萬曆四十五年の「金瓶梅詞話」本であるから、これは嘉靖の世が終つてから既に約五十年も経っている。この間は時間的にあきすぎであるから、現存する「金瓶梅」が原作者の書いた原作そのものかどうかということも疑われる。

二、平凡社刊 中國古典文學大系「金瓶梅」に見える小野忍氏による解説。

三、Patrick D Hanan "Sources of the Chin Ping Mei" *Asis Major, New Series, Vol. X, Part I, London, 1963*

四、拙稿「『金瓶梅』における諷刺—西門慶の官職から見た—」函館大學論究 第十八輯所收 一九八四年を参照されたい。

- 五、前掲小野氏解説（注二）の他に、鄭培凱「酒色財氣與『金瓶梅詞話』的開頭——兼評『金瓶梅』研究的索隱派——」『臺港『金瓶梅』研究論文選』江蘇古籍出版社 一九八六年所收を参照のこと
- 六、たとえば、卜鍵「金瓶梅作者李開先考」甘肅人民出版社一九八八年を参照のこと
- 七、譚正璧「話本與古劇」上海古籍出版社 一九八五年「三言兩拍本事源流述考」の條を参照のこと
- 八、P. D. Hanan氏前掲論文（注三）
- 九、劉中光「『金瓶梅』人物考論」「『金瓶梅』作者之謎」（寧夏人民出版社 一九八八年）所收の他に、拙稿「『金瓶梅』における諷刺と洒落について」（『國語と教育』第十九號 一九九四年 長崎大學國語國文學會刊）を参照のこと
- 十、明らかに人名の誤字と認められるのは、以下の通りである。  
四十八回の韓侶は、正しくは、韓侶（『宋史』卷471）六十四回の譚積は、宦官で、正しくは、譚積（『宋史』卷468童貫傳）六十五回の狄斯朽は、正しくは狄斯彬 七十回の賈祥も宦官で、正しくは賈詳（『宋史紀事本末』卷50）同回の何沂も宦官で、正しくは何沂（『宋史紀事本末』卷50）
- 十一、前掲拙稿（注四）参照のこと